

池上嘉彦著「第II章 伝えるコミュニケーションと読みとるコミュニケーション－伝達をめぐる」『記号論への招待』、岩波新書、1984年、pp.42.-49.

- ・ 引用文は「」で括った
- ・ 術語は〈〉で括った
- ・ 補足は（）で括った
- ・ 本文にない内容、発表者の考えには※を付した

【今回の範囲の内容】

- ・ 「理想的」なコミュ～は〈コード〉から逸脱しないが、人間が関与するコミュ～は、その逸脱によって複雑な様相を呈する
- ・ 記号論の研究分野としての〈統辞論〉(syntactics)、〈意味論〉(semantics)、〈実用論〉(pragmatics)が示される。
- ・ 人間が〈メッセージ〉を理解しようとする際、受信者が参照する〈コード〉と〈コンテキスト〉は相補的な関係となる。
- ・ 受信者が〈メッセージ〉を理解する手段において、「コード依存型」なら「解読」、「コンテキスト依存型」なら「解釈」。

【各節の内容】

■ 「『機械的』な伝達と『人間的』な伝達」 (pp.42-44)

- ・ 「理想的」なコミュ～とは、伝達内容がその過程でまったく損なわれないものである。それは「人間的」ではなく「機械的」。
- ・ 「理想的」なコミュ～は、「完全にコードの規定に従って」行なわれる。伝達回路の外からの関与は完全に排除される。
- ・ 人間が関与するコミュ～は融通性をもっている。つまり、〈コード〉の逸脱によって複雑な様相を呈する

▼「理想的」なコミュ～とは、伝達内容がその過程でまったく損なわれないものである。

- これは「機械を発信者と受信者として」情報の伝達する場合に当てはまる（※wwwでの情報通信など）
- 装置（機械）であれば、伝達の仕組みを作っておけば、「完全にコードの規定にしたがって作動する」。
- 「発信者」と「受信者」との「閉じた」情報伝達回路によって、外部からの関与は完全に排除される。

- ▼ 一方、人間が関与するコミュ〜は融通性をもっている。そこでは〈コード〉の逸脱によって伝達の様相は複雑なものになる
 - 機械が関与する伝達の場合は、〈コード〉の規定を逸脱していれば、受信者は無視する(※ エラーを返す)
 - しかし、人間が関与する伝達では、受信者が拒絶されるとはかぎらない(母子の対話、詩の読者、外国人との対話)
 - 発信者もまた、常に〈コード〉の規則にそった言い方はしない(間違い、意図的に逸脱した表現など)
 - 人間が関与する際に現れる、コミュ〜の複雑なる「興味深い様相」の根源には、人間の「主体性」の存在がある。

※ 〈コード〉とは？ (p.39)

- ・ 発信者と受信者との「共通の了解に基づいた決まり」(メッセージの作成と解読のための規則)
- ・ 「伝達において用いられる記号とその意味、および記号の結合の仕方についての規定、、、が含まれる」(つまり、言語を〈メッセージ〉とするならば、〈コード〉とは「『辞書』と『文法』に相当するもの」)

■ 「『統辞論』、『意味論』、『実用論』」(pp. 44-46)

- ・ 原理的な「理想的」なコミュ〜に人間が関与することで、どのように修正され、現実的なものとなるか？その考察の準備。
- ・ 記号論の研究分野としての〈統辞論〉(syntactics)、〈意味論〉(semantics)、〈実用論〉(pragmatics)が確認される。
- ・ 情報伝達において、私たちは、人間の主体的な働き(コードの逸脱をもたらす不確定な要因)を含めてモデル化すべき。

- ▼ 情報伝達において、私たちは、人間の主体的な働き(コードの逸脱をもたらす不確定な要因)を含めてモデル化すべき。

- ※ p40 に示された方針に修正が加えられる。つまり、術語(〈メッセージ〉や〈コード〉など)を導入して「理想的」な伝達の条件を考える(p.40)方針から、そこに人間の関与を加えた「現実的」モデルの考察への修正
- ただし、「この問題を考える前に」、その考察に必要な、記号論的な認識の枠組みを整理する。

- ▼ 〈統辞論〉(syntactics)、〈意味論〉(semantics)、〈実用論〉(pragmatics)。記号論の3つの研究分野。

→ この3つの分野は、コミュニケーションの場に存在する3つの要因に着目して設定されたもの。

- 要因1「記号」(それ自体)
- 要因2「指示物」(記号によってしめされる対象)
- 要因3「使用者」(記号を使用する人間)

→ 記号論の研究分野、その1 〈統辞論〉(syntactics)

- 「記号」それ自体と、「記号」同士のつながり方について研究する分野
- 言語学にたとえるなら、単語と単語のつながり方の規則がしめされた「文法」に着目する分野。

→ 記号論の研究分野、その2 〈意味論〉(smantics)

- 「記号」と、その「指示物」(記号が指し示す対象)の関係について研究する分野
- ※ 言語学にたとえるなら、単語とその意味の規則がしめされる「辞書」的な興味に導かれた分野。

→ 記号論の研究分野、その3 〈実用論〉(pragmatics) ※ 〈行為論〉、〈語用論〉ともいう

- 「記号」と、その「使用者」(記号を使用する人間)の関係について研究する分野
- 「理想的」なコミュニケーションの場に人間がうみだす「不確定な要因を導入」して考察する分野。

→ 人間は、、、

- ・単に「規則に支配されて振る舞う」存在ではない。
- ・「規則を変更」し、「新しい規則を創り出す」存在でもある。その変更や創出の様相は「不確定」な要因による。

※ 記号論を3分野に区別したのは、記号論学者 チャールス・ウィリアム・モリス (1903-1979, W. Morris)
c.f. モリス『記号理論の基礎』内田・小林訳 (1938 = 1988)

■ 「『コード』と『コンテキスト』」(pp. 46-48)

- ・ 〈コンテキスト〉は、〈コード〉を逸脱しようとする「使用者」と、「使用者」を拘束しようとする〈コード〉を取り持つもの。
- ・ 人間が〈メッセージ〉を理解しようとする際、受信者が参照する〈コード〉と〈コンテキスト〉は相補的な関係となる。

▼ ※ 〈コンテキスト〉(context) とは？

→ 文章の前後の脈略。文脈。(「コンテキスト」『広辞苑』)。

▼ 〈コード〉を超えようとする「使用者」、そして、「使用者」を拘束しようとする〈コード〉

→ 「使用者」(人間)は、主体的であるために、ときに、規則の支配から逸脱しようとする。

→ 一方で、〈コード〉から逸脱した記号は、受信者には伝達しにくいものとなる。したがって人間は〈コード〉の拘束をうける。

▼ 〈コード〉と〈コンテキスト〉の関係性 (※ その1)

- ・ 〈メッセージ〉が〈コード〉に従っている時 = 〈コード〉を参照して読む。〈コンテキスト〉は基本的に不要。
- ・ 〈メッセージ〉が〈コード〉に従っていない時 = 〈メッセージ〉が使用された〈コンテキスト〉を参照し、
まずはその〈メッセージ〉が読むに値するものかの判断がなされる。

- ex) 1. わけの分からない詩の作品がある (= この作品は〈コード〉を逸脱している。一体、読むに値するのか?)
2. どうも高名な詩人が書いた作品らしい (= 〈コンテキスト〉を参照することで、読むに値すると判断する)

▼ 〈コード〉と〈コンテキスト〉の関係性（※その2）

- ・〈メッセージ〉が〈コード〉に従っている時 = 〈コード〉を参照して読む。〈コンテキスト〉は基本的に不要。
- ・〈メッセージ〉が〈コード〉に従っていない時 = 〈コンテキスト〉を参照して読む。〈コード〉は役に立たない。

→人間が〈メッセージ〉を理解しようとする際、受信者が参照する〈コード〉と〈コンテキスト〉は相補的な関係となる。
→「2つの場合を両極として、その中間にいろいろな段階がありうる」

▼ 「コード依存型コミュニケーション」と「コンテキスト依存型コミュニケーション」

- ・「コード依存型コミュニケーション」 = 詩の世界、子どものコミュニケーション
- ・「コンテキスト依存型コミュニケーション」 = 科学的なコミュニケーション

■ 「『解説』と『解釈』」 (pp. 48-49)

- ・受信者が〈メッセージ〉を理解する手段において、「コード依存型」なら「解説」、「コンテキスト依存型」なら「解釈」。

▼ 〈メッセージ〉の理解における「解釈」と「解説」の違い

- 「コード依存型」 = 「解説」 = 受信者は受動的に読む（※ decoding）
- 「コンテキスト依存型」 = 「解釈」 = 受信者は主体的に推論する（※ interpretation）

■ 問題提起 新しい〈スタイル〉の表現を生むためには〈コンテキスト〉参照が不可欠か？

池上氏によれば、人間が〈メッセージ〉を理解しようとする際、受信者が参照する〈コード〉と〈コンテキスト〉は相補的な関係（互いに不足分を補う関係）になるという。つまり、例えば〈コード〉で解説できない時は、〈コンテキスト〉（その不明なる記号表現を作者が作り出した背景、文脈）を参照することで解釈も可能とされる。

ここで、私たちが、様式的側面（=〈形式〉form）での新しい表現の創出を目的としている場合を想定してみたい。その場合、上の議論でいえば、完全なる〈コード〉依存では新たな〈形式〉を生み出すことは出来ないことは明らかだ。

一方、すくなくからず〈コード〉から逸脱している表現の場合（そして、それを受信者が〈コンテキスト〉を参照することでまずは「解釈」する値があるものと判断したならば）、〈コンテキスト〉を頼りに主体的に〈内容〉を推論されることになる。つまり、〈コード〉から逸脱しているからこそ、その表現の〈形式〉は新奇性があるはずであり、そうにもかかわらず、なんらかの内容を伝達することが可能であることになる。すなわち、新しい〈形式〉をもった表現が成立している。

上の前提を勘案するならば、作者が、なんらかの〈形式〉的に新しい表現を生み出すためには、作者が自らの伝えたい〈内容〉に着目した上で、その〈内容〉を〈コード〉参照によって表現するのではなく、むしろ、その〈内容〉が生まれてくるための〈コンテキスト〉を参照することが不可欠となる。端的にいえば、〈形式〉的に新しい表現を生み出すには〈コンテキスト〉を参照すればよいということになる。しかし、ここに反論の余地はないか？今回は、この主張に対する批判を可能なかぎり探し当ててみたい。果たして、〈コンテキスト〉の参照なしで、表現が成立する（相手に伝わる）新たな〈形式〉創出の可能性はあるのか？